

座談会形式による指導活動の試み

日中文化相対化の視点

平城 真規子

0．はじめに

1．文化相対化の視点

2．座談会

2 - 1．目的

2 - 2．方法

2 - 3．実践記録

2 - 4．評価

2 - 5．留意点

3．おわりに

0．はじめに

所沢センターは帰国者に対する異文化適応教育の実践の場として、「日本語日本事情教育」に取り組み、指導目標や指導内容の明確化および指導方法の改善に努めて来た。とりわけ文化学習としての日本事情の指導は参考にするべき先行モデルも少なく、指導方法、評価の問題など未だ試行錯誤の連続で、改善のための作業が現場の教師によって続けられている。

まず文化学習に関してセンターの指導目標と内容を示す。センターの指導目標構造表の中では中目標1「身近な生活行動場面の基礎知識・基礎技能」と中目標2「将来の生活に有用な基礎知識・基礎技能」の枠組みの中で文化学習の目標と指導項目を列挙した。(目標構造表の内容については紀要2号「カリキュラムおよび理念的目標の構造化について」参照、なお言語も広い意味で文化の範疇(はんちゅう)だが、これについては中目標1、2の他、主に、中目標3「身近な生活や将来の生活の基礎となるコミュニケーション力」の枠組みの中で目標を設定し、指導を行っている。)

このうち中目標2の下位にある以下の目標領域に関する指導方法について従来より議論されてきた。

小目標2) 異文化「異文化社会での適応に伴う問題、及び日本での人間関係において生ずる問題を知り、自分の問題として対処法を考えてみる」

達成目標 「異文化事例等を通じて、文化の異同を把握し、その背景について考えてみる」

センターの学習者の大半は日本語未習者またはごく初級段階の学習者であるため、日本語を媒介とした文化学習が難しい。このような未習者クラスでは、中国語を媒介とした解説形式で日本社会についての知識や情報を提供する方法の他、体験学習として生活場面での行動達成を果たしつつ、必要な知識情報を体得してもらう方法が中心になってくる。しかし、上記目標領域は対人関係のあり方などの人的環境や人々の価値観、習慣などの精神的、文化的環境に関する学習で、多様で複雑な側面を持っており、講義形式で提供することの難しさやその効果が問題となってきた。ただ表面的な日中の違いを見るだけではなく、その社会的文化的背景に至る知識を、教師が一方向的に与える形ではなく、学習者自身が主体的に学んでいけるような方法で提供したい。これを可能にするための一つの試みとして、センターでは一般の日本人ゲストを招き、通訳を介した座談会という方法を用いて、日本と中国の文化の異同を明らかにしながら互いの文化への理解を助けることを目指してきた。

本稿では座談会の目的、方法や実践記録を中心に現状を記述し、目標構造表と照らすことで課題を明確化していきたい。その前に、先ず帰国者にとっての文化学習の意義について確認しておく。

1. 文化相対化の視点

学習者は帰国孤児とその同伴家族及び帰国婦人の同伴家族で、年代は学齢期の者や青年層をはじめとして60歳くらいまで幅広い年代層が揃っている。母語は中国語、母文化も中国である。過去に日本人や日本文化との接触体験を持つ者は少なく、孤児の中に短期間の一時帰国を果たした者がいる程度である。また帰国者が中国にいる間に日本について知り得る情報も極めて限られているのが実状のようである。

帰国者は日本に永住帰国後、長期的なスパンで、社会、文化的な適応を目指す立場にあると同時に、センター退所後は生活者としてただちに周囲の人

と人間関係を築いていかなければならない。しかし入所直後の多くの学習者には、日本語学習の必要性は意識されているが、言語以外の文化的側面に関する学習の必要性は必ずしも自覚されていない。漠然とした不安はあるが何が問題なのか見えないでいる人が多いように思う。

では帰国者は日本社会に定着後、どのような困難に直面するのだろうか。全国社会福祉協議会異文化適応教材開発委員会は受け入れ体制の不備に起因する問題の他、異文化適応上の諸問題として、以下のように分類した¹⁾。

コミュニケーション・パターンの違いからくる問題

対人関係の持ち方にみられるくい違い

労働や職場におけるくい違いからくる問題

日常生活習慣上のくい違い

日本語学習場面で発生する問題

子どもの学校教育やしつけに関わって発生する問題

子どもたち自身が体験している問題

中国社会で身に付けた考え方や行動規範が日本では受け入れられず、戸惑いや不快感を覚えたり、周囲との摩擦を引き起こしたりする。こういった問題が解決されないまま放置されると、深刻な身体症状を伴った不適応状態に陥るケースもあるという。不適応を予防する上で必要なことは「異文化に接する基本的な姿勢を身に付ける」こと、つまり「自文化中心主義や過度な同化・順応のパターンに陥らず、二つの文化の同じところと異なったところを理解して、生活の中でコントロールできるようになることが大切」という。そして異文化について知り、理解するには、「自文化との比較対照を通して客観的、相対的に認識する姿勢や心構えが必要」ということである。

勿論こういった能力とか態度は短期間のうちに身に付けられるものではなく、現実の生活の中で種々の体験を積み重ねながら、徐々に完成されていくものと思うが、センターでの学習においても様々な学習活動を通じて、文化相対化の視点を提示してきた。座談会はこれを体験化するための試みの一つである。

2. 座談会

2-1. 目的

座談会の目的を大きく整理すると以下のようになる。

異文化の存在に気付く（＝自文化に気付く）

異文化に接触したときの疑問や違和感を解消する

文化相対化の視点（文化的社会的背景の存在を認め、背景を知ろうとする姿勢）を養う

については、問題意識のない学習者や漠然とした不安はあるが何が問題になるのかイメージできない学習者に、身近な事例を通じて、異文化の存在に気付いてもらう。

については、日本人や日本文化と接触した際抱いた疑問や違和感を、質問して解決してもらう。は を通じて自分化と異文化を比較しながら客観的に捉える目を養う。

以下に異文化と接触した時に生じる一般的な心のプロセスモデルを示す。

異文化と接触した時、自他の文化を比較する

自文化と異なると 違和感や不安を感じる		自文化と同じであると 安心する
------------------------	--	--------------------

	背後にある相手文化の中の社会的ルール 自分の行動に相手文化の人がどう反応するか分からず不安	
--	--	--

人に聞くなどして調べてみる		持っている情報から 自分で結論づける
---------------	--	-----------------------

行動の背景や理由がわかる		情報不足で疑問、違和感が残る
--------------	--	----------------

共感できる		共感できない
-------	--	--------

誰かに自分の気持ちを聞いてもらう	諦めるが、フラストレーションが溜まる	気にしない
------------------	--------------------	-------

同文化内の信頼できる人、同じような体験をしている人
 相手文化内の人で 自分を受け入れてくれる人

座談会の流れの中での学習者の心の動きのモデルは次のようである。

問題意識のない人にとっては

異文化に気付いて、疑問や不安が生じる。

日本に関する知識を得て、不安が解消される。

違和感や不安をもった人にとっては

溜まっている疑問や不安が解消される。

新たに日本に関する知識を得て、不安になる。

新たな疑問、不安が解消される。

司会者は座談会の大きな流れの中で上記の過程がうまく進行するように援助する。

2 - 2 . 方法

座談会とは文字通り、形式ばらずに自由な雰囲気の中で語り合う会で、一つのテーマに沿って、学習者とゲストの双方が互いの経験や知識、意見を出し合い、日中の文化の相違点とその背景について明らかにしていくことを狙いとする。要素として、議事の進行を調整する役割を担う司会者の他、言語の媒介役として通訳が介在し、複雑で微妙な問題まで情報を伝え合うことが可能となる。日本側の参加者として一般の日本人ボランティアの協力を得ている。以下各人の役割について解説を加える。

(1) 司会者

討議の進行調整役であり、通常クラス担任か他の司会経験を持った教師が担当する。まず場の雰囲気作りから始め、座談会の進行にあたって、参加者

の積極的な発言を引き出し、集団としての過程が調和的に進行するようコントロールすることが主たる役割となる。話題の展開の仕方、まとめ方など経験を通じた技術の蓄積が期待される。初心者の場合、過去の座談会記録の分析から、効果的な切り口、ハプニングの処理、軌道修正の方法等について予めシュミレーションを行っておくのも良い。ただ、ここで留意しなければならないのは、司会の大原則が自然な会話を促すことで、参加者の自由で率直な態度を引き出すことにあることである。予め準備した話題（学習項目）をすべてこなすより、学習者が異文化に気づいたり、疑問を解決したり、心理的に成長することを助けることのほうが大切である。会の進め方について以下に具体的なスキルを挙げる。

場の雰囲気作り

通常、初対面の場合には、互いに緊張や堅苦しさが感じられるものなので、座談会の前に他の交流活動（例：日本語を使ったコミュニケーション活動やゲーム等）を行い緊張を軽減しておくことよい。また、座談会の導入時においても、直ちにテーマを提示することは避け、本題に直接関係しないあたりさわりのない話題で思いついた事を何でも発言してもらい、質問しやすい雰囲気を作っておく。

具体的な事象、行動を通してイメージ化

文化を比較して見るということは、「日本はこうだ」「中国はこうだ」と文化を固定的に捉えて語ることではない。確かに社会全体の特色としてある傾向といったものは存在するが、同時に個人的・地域的、あるいは状況の違いによる差異等も見逃してはならない。相手文化について客観視できる目を養うには、自文化についても冷静に見ることのできる目が必要で、自文化の中の他者の経験や考え方についても耳を傾け、事実を再認識したり、新しい発見をしたりできるとよい。

そのためには、各自が自分自身の身近な体験や考え方に根ざして発言しながら、物事を明らかにしていくことが大切である。従って司会者は話題を進める問いかけも「あなたの国では…」と言った一般的な質問形にならないよう留意し、「あなたが～で～する場合」等と時、場所、ケースの限定された事象、行動を明示してイメージしてもらおうようにする。

これはまた抽象的なテーマをわかりやすくイメージしてもらうためにも有効である。例えば交際がテーマなら「訪問事情」「割り勘事情」「贈り物事情」などいくつかのサブテーマに分け、割り勘事情の場合、おごってもらうとしたら、友人同士ではあるか、相手が上司の場合はどうか等と、みんなが同じ状況をイメージできるようにする。

話題の整理

自由な会話の雰囲気の中では時として話の筋道に関係ない話題が提出されることがある、座談会の大原則からは許容できる範囲でこれらの質疑応答も受容していくが、あまりにも予定していた話題から逸れ、本当は元の話の方が双方共興味があるはずである場合は、タイミングを見て、本筋に戻すようにする。また司会者、ゲストにも答えられない情報は「後の授業で扱う」ことにして処理する。

話題の準備

参加者から積極的な発言が出ない場合に備え、おもしろい切り口となる質問を準備しておく。教師自身の体験や中国通から得た興味ある事項をリストアップしておくといよい。

(2) 通訳

中国語のできる教師が担当する。通訳の技能は司会者の技能同様、会の成功の鍵を握る重要な要素であり、理想的にはバイリンガルの力量を持つ者が望ましいが、現状は人材の確保が難しい。そこで限られたテーマについて経験を積むことによって水準の維持を図っている。具体的な技能として、通訳を介する場合、進行が間延びして参加者の集中力が途切れないように、簡潔に訳すことを心がけたり、逆に発言者の説明が不足している場合は話しの内容を変えない範囲で多少の補足説明を加えたりすることもある。その意味で司会者の補助的役割を担っている。

(3) 参加者

前述のようにセンターでは外部から団体や個人のボランティアを募り、交流相手を確保している。考慮すべき要素として年齢、性別、職業、生活地域、参加の動機などが挙げられる。成人クラスの場合、通常よく扱うテーマでは、ゲストは社会人が中心になる。年齢は幅があってもよいが、学習者と同年代の

人が含まれているほうがよい。また男女双方いて生活歴等も多様であること。中国語や中国文化との接触体験が無いか少ないこと、参加動機として、根底に異文化への関心があるほうが望ましい。しかし、実際には事前にこれらの点をすべて満足させた集団を作ることは難しいので、可能な範囲でゲストの組み合わせを操作している。同じゲストが何期かに互い座談会に参加する場合は、毎回初めてのテーマであるよう配慮し、同じテーマでの参加は避ける。座談会の中で双方に新鮮な発見や驚きが生まれ、活発な発言につながることを期待するからである。

ゲストには前もってクラス担任による実習説明が行われ、学習者側の諸事情（大人・青年クラスの別、年齢性別構成、孤児本人配偶者・二世三世等の別、センターでの学習期間、中国での経歴等の背景）に加え、座談会の目的とゲストの役割が確認される。特に後者については十分な理解を得ておく必要がある。ゲストが自らを教える立場と認識し「日本ではこうしてはいけません。こうすべきだ。」といったような発言が出た場合、これはたとえ学習者の日本社会での適応を助けるためという善意ではあっても、結果として早急な同化を迫ることになり、座談会の本来の目的からは遠い。座談会は一方が教え他の一方が教えられるという一方向的な関係ではなく、対等な関係性の上に成り立つ相互学習の場であり、互いにとっての異文化理解のための機会であることを強調しておきたい。

最後に参加者相互のグループダイナミックスが効果的に働くための要素として参加人数、座席の位置等も重要である。経験から割り出された条件を挙げると、集団の大きさは、成員が十分に参加でき、司会者が扱いやすい人数で、理想は10人前後、多くとも12、3人までが望ましい。参加者が多すぎると次のようなデメリットが生じる。

- 顔と名前を記憶できず、ラポールを形成しにくい
- 一人当たりの発言時間が限定され、情報量が不足する
- 発言の少ない人が出る
- 全員の関心興味の持続が難しい

座席は、椅子を円形に並べ、参加者ゲストはそれぞれのグループで固まらず適当に分散して座るようにする。通訳や司会者の隣の者は発言が多くなる

ことが往々にしてあるが、特定の人だけに発言が偏らないように留意する。

2 - 3 . 実践記録

(1) テーマ : 「初対面時の話題 - 共有できる話題、避けるべき話題 - 」

(2) 目的 : 初対面時の話題を素材に日中の文化の異同について話し合い、その社会的背景について考えてみる

(3) 参加者

学習者側 : 成人クラス 名 (代 ~ 代、男性 4 名女性 6 名)

ゲスト側 : 国際交流団体メンバー 4 名 (代 ~ 代 男性 1 名、女性 3 名)

(4) 指導時期 : 開講後 6 週目 (全 1 6 週)

(5) 所要時間 : 1 時間

(6) 学習活動の全体の流れ

事前準備 : 初対面時の話題 (聞いていい話題、避けたい話題) についてアンケート (資料 1 参照) 実施

このアンケートは学習者とゲストの双方に自文化の中で「初対面時に共有できる話題」は何か、自分の体験や考えを基に回答してもらおうと共に、相手文化の中ではどうか推測で回答してもらったものである。アンケートを通じて、事前にテーマを提示し、自文化についての知識を整理することができるとともに、相手文化での予測を立てることで、その正解を知りたいという欲求を生じさせ、座談会参加への動機を高めることを狙いとしている。

本活動

導入時は 1 5 分程度参加者間の自己紹介と前半の交流活動 (自己紹介項目に関する会話) についての感想を語ってもらった。以下は本テーマ部分の記録である。

学生...A、ゲスト...B

司会	今日はみなさん初対面ですが、初対面ではどんな話をすればいいか迷うこともあると思います。話題にしていること、話題にしない方がいいことについて、日本と中国を比較してみると、日中の習慣や考え方についてお互いに理解できればと思います。先日学生さんにアンケートを取りましたが、今日同じ内容をお
----	---

	<p>客さんにも聞きました。結果がおもしろかったので、それから紹介します。先ず学生さんのアンケート結果ですが、中国ではほとんど何を聞いても構わないそうです。ただ、配偶者や相手の外観についてはあまり触れないそうです。お客さんが日本では聞いていけないと思うこととして全員一致のものが「年齢」「結婚してるかどうか」「配偶者の容貌」でした。これに次いで「収入」「相手の容貌」「恋人の有無」が挙がっています。お客さんに中国ではどうなのか推測した答えを伺ってないんですけど、どうですか。</p>
B	<p>日本の場合、家族のことは聞かないと思うんですけど、中国はオープンでしょう。かなり違うなと思います。中国では年齢を聞きますが、日本では聞かないですね。年のいった方には聞かない。結婚してるかどうかも聞かないですが、中国では聞く。かえて日本より中国の方が自由じゃないかな。</p>
司会	<p>良い所をついていますね。学生さんに聞くと、ほとんど何でも聞いていいと答えてますしね。</p>
B	<p>私のような年齢の者は若い女性に結婚しているか等聞かないですよ。年上が年下に慣れ親しんでない状態で年齢は聞かないです。</p>
司会	<p>日本で聞かない方がいいこととして、学生さんが推測しているのは年齢、結婚、配偶者の容貌、収入、相手の容貌、恋人の有無ですが、実際はどうですか。</p>
B	<p>そうですね。当たってますね。</p>
司会	<p>今日はどうしてそうなのか、つっこんで伺います。先ず年齢について、二十歳位の若い人になら聞くことがあると思いますが、初対面時でも聞くでしょうか。何歳位の人には聞きづらいですか。</p>
B	<p>25歳。</p>
B	<p>女性は、まあ男性でも同じですけど、いつも若く見られたいから</p>

	聞くと雰囲気が悪くなって、話が弾まないですね。
B	女性は特にそう。
B	女の人は特に若く思われたい。百歳の女性でもそうでしょう。年を取るということは死に近づくことですからね。日本では若さはあこがれですよ。
A	中国では年を取るほど尊敬されますよ。
司会	自分の年齢より若く見られると嬉しいですか。40歳で35歳に見られるとか。
A	嬉しいです。言われたら嬉しいけど、自分の気持ちの中ではやはり40歳です。
司会	男女同じですか。自分は何歳かわかってるけど、年上に見られたいですか。年下に見られたいですか。
A	人によって違うと思います。私は実際の年齢くらいに見られたいです。
司会	年相応に見られたいんですか。
B	外面と内面は違います。日本人は若いねと言って、年を取ったねと言わないんです。中国では「何歳ですか。」と聞く、年齢が上だと尊敬される。
司会	違いますね。結婚してるかどうか日本では聞きますが、中国ではどうですか。
A	中国では習慣ですが、「あなたのとこ、まだ結婚してないの」って。
司会	初対面でもですか。
A	知り合ってからです。
司会	初対面でも結婚しているかどうか聞いてもいいですか。
A	聞いていいですよ。

A	仲良くなってから聞きます。
司会	意見が色々ですね
A	「結婚してないんですか。」とは言いませんが、「結婚してますか。」とは聞きますよ。その人が適齢期なら結婚しているかと聞くのは相手を想う気持ち、心配してあげることですから。もしも未婚だったら、良い人を紹介しましょうとなることもあります。
B	日本だと価値観が多様化してますから、結婚するしないは考え方が色々です。
A	新聞にも結婚紹介欄が多いんですが、日本は少ないですね。
司会	最近では流行ってますけど。
A	上海、北京では、雑誌とか新聞とか色々な所に結婚紹介欄が載ってます。
司会	積極的ですね。日本にもありますが。
A	そんな紹介結婚は少ないです。知人に紹介してもらう方が多いです。
司会	結婚してるかどうか聞かれて答えれば紹介してもらえたりするからですね。日本では結婚してるかどうか問題にしなかったり、結婚自体も話題にしないですね。
B	プライバシー尊重が高まってますからね。
司会	日本では聞かない話題に「収入」も挙がってますが、中国ではみなさん聞きますか。
A	聞きます。
司会	どうして。
A	工場では全部公表され、とても自由です。壁にも貼られます。
司会	日本ではそういったことがありますか
B	私も勤めに出てるんですが、公務員なら何等級ってあるけど、民

	間の会社では...ねえ。
B	初任給なら分かるけど。
司会	直接聞いたりしないんですね。
B	親しい友人とか同期の場合なら聞くこともありますよ。「いくらもらってるんだ」とか。でも段々時間経つと差が出るから。能力給で。そうなると敵同士になるんです。自分の考えでは、お金は欲しいけど、あんまりお金のことについて触れたくないと。お金について尋ねるのはタブーですね。
B	もう一つ収入のことですけど、「他人の芝生はよく見える」と。日本人は「他人事」という概念があって、収入のことについて他人は他人、自分は自分、聞いても自分にとって何にもならない。詮索して聞いても仕様がなと思うんです。
A	例えば、同じ仕事をして、一生懸命仕事して、労働時間も長い。あっちの人は一生懸命働いてないのに、給料が多いってことないんですか。収入の不合理とかないんですか。
B	そういう場合、自己申告制があるんです。私の会社では給与がおかしいという場合、4月の移動時期に上司に申告できるんです。不定期にもありますよ。課長部長に口頭で言うんです。でも同じ仕事して給料が少ないというのは、うーん微妙ですね。でも少ないですけど。他の会社は知らないですけど、出勤管理簿がありますから、欠勤したり遅刻したりしてはダメですよ。遅刻も3回すれば欠勤1回になりますから。これからは能率給、能力給が増えるでしょうから、上司の採点もありますし、営業とか非営業の違いもありますし。
司会	ちょっと話しが難しくなったようです。ところで中国では収入を尋ねるのは、違う場合があるからですか。

A	中国では給料、昇給は公開です。例えばいくらもらってるかわかりますから、少なければ上司に文句を言います。
B	違う工場で働いている人にも聞きますか。
A	聞きます。
B	日本では収入とか聞きませんね。聞くと失礼になりますから。景気が良くて、娘がボーナスもらったと自慢してる人もいますが、普通は自分の方からは聞けないですね。
司会	どうして聞けないんですか。
B	お金の事は話題にしないんです。プライバシーですから。
B	相手が多いと羨んで、相手が少ないと気持ちいい。そんな気持ちになること、中国ではありませんか。
A	ありますよ。羨む気持ちは。
司会	聞かれた時、自分の方が少ないと気分が悪くなりませんか。
A	ちょっと恥ずかしいです。
司会	それでも聞きますか。
A	ええ、いいです。
B	自分が少ないと、努力して相手を追い抜こうという気持ちになりますか。
A	今中国は開放政策で景気がいいです。給料が増えて来てます。
A	「いくらもらってるか」と聞くより「(工場は)いくら出してくれるか」という話題ですよ。
司会	まだ話したいことは沢山あると思いますが、時間が迫って来ました。他に是非聞いておきたいというはありますか。
B	日本での生活で一番不安なことは何ですか。
A	言葉です。
	中略

司会	それでは時間になりました。今日は日中の違いが少しだけですが見えたように思います。また、機会がもてたら、別のテーマで話したいと思います。ありがとうございました。
----	---

以下は同じテーマについて、別のグループで話し合われた記録だが、ここではゲストが積極的にリードしたため、司会が介在を減らしている。

	前略
司会	一覧の中で、特に聞かれて不愉快と思う項目は？
B	収入、学歴、部屋の大きさ、地位。これを聞かれると非常識な人だなと思います。
司会	どうして聞かれると不愉快なんでしょうね？
B	人間の価値は外側では決まらないからです。聞く人の人格が疑われます。表面的なことで相手を測っているようで。
司会	ゲストは中国でもこれらは聞かないと推測していますが、実際はどうですか？
A	中国ではこれらは聞いても構わないですよ。国情の違いによるものですが。例えばY先生と初対面の時、「先生は何級の教師ですか」「～級です」「あなたは何級の課長ですか」「私は～級です」といったやりとりがあってもいいですよ。「部屋の広さについても～㎡」とかね。
A	中国では部屋は公営ですからね。
B	私が聞いてはまずいと思う理由は、人間のランク付けをしているような気がするからです。どうして地位とか聞くんですか？異文化だなあと思うんですけど。
A	...
B	例えば部屋が狭い場合、あえてその狭い部屋のことを言うんですか？収入も同じですけど。日本人は自分から言わないと思います

	中国の人が言うとしたら、国民性の違いと言うことなんですかね
A	部屋が広くても狭くても自分の努力の結果というわけではないですから。
B	社会主義と資本主義の違いということでしょうかね？
B	地位についても、日本だとプライバシーに関することですが、中国ではどうして聞くのですか？
A	一口に言えば、国情の違いです。部屋についてですが、何か企業に貢献すれば国の手配で広い部屋に移ることになるし、動乱の時代、運が悪ければ小さい部屋に移されることもある。経済的な理由ではなくて、国情によるものですよ。家はほとんど国のものですから。地位についても同じ。その人の能力ですべてが決まるわけじゃないですから、中国ではつまりそういうことなんですよ。
B	日本ではこれらを突き詰めると、人間を差別しているようで、人権の問題というか、プライバシーの侵害になるのでなるべく聞かないと思うんですが。
司会	～さんの場合はどうして聞くんですか？
A	地位や収入を聞くのは、相手への敬意を表すことなんです。相手について関心を示すことです。興味のない相手には聞かないでしょう。
B	じゃ、別に失礼ではないんですね。私は先程Kさんと会話したんですが、失礼になると思って自分からあまり質問しないようにしてたんですが、Kさんは自分から中国でのことを色々話してくれました。日本では自分のことについて良い話をあまり言い過ぎてても自慢しているように取られてまずいんですけど。
A	彼が課長で、私が部下として、我々二人が初対面の人に会う時、私が相手に対し「こちらが課長です」と紹介します。課長自身が

	「私は課長です」とは言いません。
B	その点は日本も同じです。
B	ところで、中国の人と初対面の時、友達になりたいと思ったら、 どんなことを聞けばいいですか。
A	何でも聞いていいですよ。
B	聞いていけないことはないんですか。
A	個人の秘密に属すること、例えば罪を犯したことはあるかとか。それ 以外は何でも聞けますよ。
B	収入とかは個人的なことではないんですか。
A	...
司会	学生さん間の意見は同じですか？
A	必ずしもそうではないですよ。中国人にも面子はありますから。 誰もが初めて会った時、収入や地位を聞くかと言えばそうじゃな いと思います。
司会	あなたが、この中で聞かないことは？
A	今、話題に上っているようなことは私は聞かないですね。例えば 部屋が広ければいいけど、狭いと面子がありますからね。
A	私も初対面の時、これらを必ず聞くというわけではないです。普 通よく聞くのは、年齢、仕事、学歴ですね。
A	聞いても構わないが、必ず聞きなさいと言ってるわけじゃないん です。
A	私は何でも聞きますが、どうしてかと言うと、初対面の時、部屋 の条件が悪いと聞いていたら、二度目にあった時、「その後、部 屋はどうですか。」と尋ねます。相手のことを心配しているから

	です。
A	私も何でも聞いていいと思いますが、注意の必要なものもありますよ。例えば、私が 歳位の男性で、若い女性に「恋人いる？」と聞くのはまずいです。女性同士なら構わないですが。地位についても、相手の服装が立派なら地位を尋ねてもいいけれど、貧しい身なりの人に地位を尋ねたりしません。
司会	個人によっても、状況によっても多少違うみたいですね。
A	それにしても、日本は避けるべき話題が多いような気がします。中国は本音の社会ですから、 %以上本音で話せますよ。でも日本は本音と建て前が違うと思います。
B	そうかもしれません。
司会	今日は内容豊かに話し合えました。時間の関係でここまでとなりますが、ありがとうございました。

2 - 4 . 評価

学習者評価として今回は事後に感想のアンケート回答(記述式)を求めた。知識と心情の両面の変化を読みとりたいが、アンケートから得られる情報は少なかった。質問形式に問題があった点もあるが、その他の原因として、記述式の回答に不慣れな点や自分のプライベートな感想をアンケートという形で記述することに抵抗があり、さしさわりのない感想を述べたという可能性もある。また、座談会直後では知識情報が十分に整理されておらず(情報自体が不十分な可能性もある)回答しづらかったかもしれない。

評価の問題は、従来行ってきた数値化された学習者評価のプラス面マイナス面(本紀要「学習者 日本人ボランティアの交流活動プログラムにおける学習者評価の可能性」参照)と合わせて、今後も検討を続けていきたい。

2 - 5 . その他の留意点

座談会の成否については、司会と通訳の技能に頼る面もあるが、学習者の

動機付けも大切である。事前に話し合いたいテーマについて意見を求めたり、授業で十分な動機の掘り起こししたりする必要がある。さらに2つの留意点をつけ加える。

先に、司会の手法の一つとして、具体的な事例として質問することを挙げた。だが、注意しなければならないのは、例えば、中国の人の意識の中では都市部と農村部という区別が明確に存在し、現在でもなお衣食住や教育レベルの上で生活格差が歴然としてある。従って「都会ではどうですか、田舎ではどうですか」と聞くと、都市に住む者の発言からは時として優越感が感じられ、帰国者間のラポールをたちまちのうちに壊してしまうことがある。また、その他のテーマでも、話が進行する中で、帰国者が問題を生活レベルの差と意識すると「中国でも同じです。」といった防御的な発言に変わり、以後話が沈滞化することがある。比較的プライドの高い人に見られたが、学習者のこういった心理は何を示しているのだろうか。

文化の範疇は本来広範なもので、気候風土といった物理的環境、価値観、風俗、習慣といった精神文化的環境、衣食住といった物質的な環境等に分けられる。しかし日本と中国を比較する時、学習者側の立場に立てば、文化の差が生活レベル即ち物質的な文明度や社会の発展度の差に捉えられやすいという危険性をはらんでいる。それはまた中国での都市と農村の文化差の構図が日中の文化差の構図と相似形として見えてくるということである。対等な関係性の上に成り立つ文化の相対化とは、日本人側のように上記の意味で優位に立つ者にとっては意識できても、帰国者にとっては必ずしも容易ではないのかもしれない。

参加者双方の親密度とテーマの選択との関連も問題である。外部のボランティアとの間で行う場合、初対面あるいは1、2回交流を経験した程度の関係である。依然多少の緊張と遠慮を伴う。テーマによってはどれほど本音で聞きたいことを聞けるか、深められるかという問題がある。例えばトラブル事例を扱ったものがその例である。まずトラブル事例のビデオ²⁾を見て、座談に移るが、視聴後参加者双方は多少なりと不快感や気まずさを感じている。そのような場合、初対面の関係で核心に迫る質問や心情の吐露はお互いにしづらい。複雑で深刻なテーマは、人間関係の成立した教師や先輩帰国者など

との座談会のほうが望ましいことがある。

外部ゲストとの座談会では、以前は様々なテーマを扱ってきたが、最近はい上りのような問題にも留意して、テーマの選択が慎重に行われ、学習効果の高いもののみが定番化されてきている。

3. おわりに

それでは、避けられない文化差を背景としたテーマを扱う方法として、文化の優劣という捉え方に陥らないで学習するにはどうすればよいだろうか。帰国者が心理的に受け入れやすい形として、自ら様々な異文化体験を経て適応を果たしてきた先輩帰国者にコメンテーターとなって体験談を語ってもらう方法も考えられる。センターでもすでに行われているが、適切な人材を確保して機会を増やせるとよい。

今後の課題として座談会自体の改善も必要である。本例は1時間というミニ座談会であったため、やや中途半端な流れで終了せざるをえなかった。座談会には導入部を含め最低1時間半の時間を当てたいが、前半の交流活動(通常1時間程度)と合わせて全体で2時間が参加者の集中力の限度と考えると、座談会のミニ化もやむを得ない。この後座談会を受けたF B授業や類似のテーマを扱った授業で、教師が情報の補充を行ったり、学習者からの質問に答えたりしながら共感的理解を目指していく必要があると思う。また、座談会で学習者の主体性をより引き出すために、学習者自身に司会を委ねる試みもあってよい。

これまで見てきたように、座談会の水準を維持するには、様々な条件を満たす必要があるし、万全の準備で臨んでも偶然性に左右されることもある。難しい指導活動の一つだが、センターではこれまでの経験の蓄積の上に、新しい試みにも挑戦しながら、目標に到達する努力を続けていきたい。

注

- 1) 全国社会福祉協議会異文化適応教材開発委員会(1987)『入郷随俗』
- 2) 上記『入郷随俗』のビデオ教材で、先輩帰国者が日本社会で実際に直面した異文化衝突事例を紹介する

参考文献

小林悦夫（1988）「中国帰国者に対する日本事情の指導」『日本語教育
65号』日本語教育学会

続・村上『心理学講座・面接法』東京大学出版会

資料1

資料1 事前アンケート「初対面時に話題にできること」

項目	（学生10人の回答）		（ゲスト4人の回答）	
	中国で話題にできる	日本で話題にできると思う	日本で話題にできる	中国で話題にできると思う
1. 名前	9	8	4	
2. 年前	10	0	0	
3. 出身地	10	5	3	
4. 家族人数・稿成	10	5	4	
5. 結婚しているか	9	0	1	
6. 現在の住所	10	4	2	
7. 場標	10	2	2	
8. 観場の名称	10	4	0	
9. 観場での地位	10	2	0	
10. 収入	1d	1	0	
11. 部屋の大小・間数	10	3	0	
12. 家賃	10	4	0	
13. 学歴	10	6	0	
14. 趣味	9	4	4	
15. (榊が妹婿の筈)恋人の有無	10	1	0	
16. 相手の外観を誉める	5	1	0	
17. 配偶者の外観を誉める	5	0	1	